

海外の畜産物の需給動向

牛肉

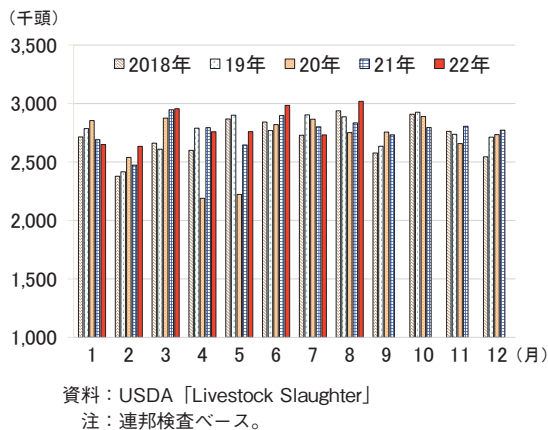
米 国

干ばつによりと畜頭数は増加

牛肉生産量は増加、牛肉在庫量は高止まり

米国農務省経済調査局（USDA/ERS）によると、2022年8月の牛と畜頭数は301万8700頭（前年同月比6.5%増）とかなりの程度増加した（図1）。これは干ばつによるフィードロットへの導入・出荷が増加していることが要因とされている。これを受けて、8月の牛肉生産量も前年同月比6.2%増加した。

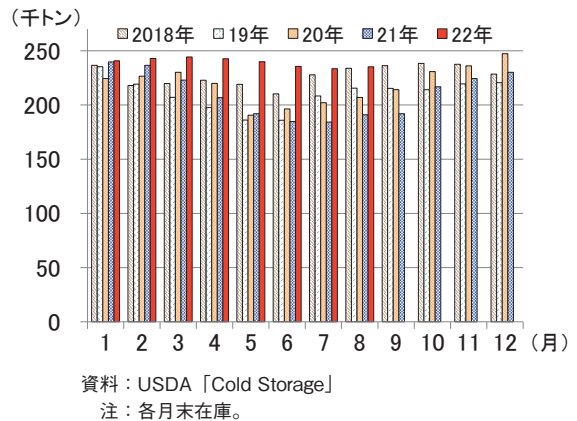
図1 牛と畜頭数の推移



一方、同月末の牛肉在庫量は23万5200トン（同23.2%増）となった（図2）。前年同月比では大きく増加しているが、今年は春から夏にかけて季節的な在庫量の減少が見られず高止まりで推移していたことから、前月比では小幅な増加にとどまった。現地報道に

よると、生産量が増加しているにもかかわらず同月の在庫量の増加幅が少なかったのは、旺盛な需要を示唆しているためとされている。

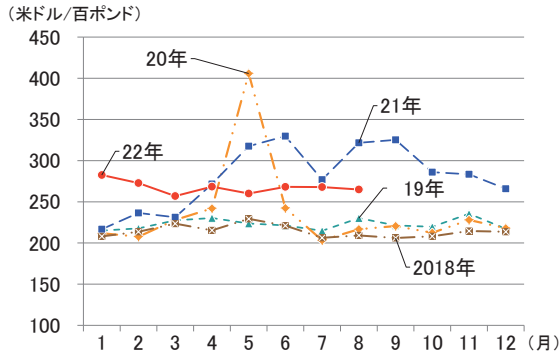
図2 牛肉の期末在庫の推移



卸売価格、高値で推移しつつも前年同月比で大きく下回る

米国農務省農業マーケティング局（USDA/AMS）によると、2022年8月の牛肉卸売価格（カットアウトバリュー）は、100ポンド当たり264.9米ドル（1キログラム当たり851.54円：1米ドル＝145.81円^注、前年同月比17.6%安）となり、平年と比較すると高値で推移しつつも前年同月を大幅に下回った（図3）。現地報道によると、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行により価格が乱高下した過去2カ年とは異

図3 牛肉卸売価格の推移



資料：USDA [Livestock & Meat Domestic Data]
 注1：カットアウトバリュー（各部分肉の卸売価格を1頭分の枝肉に再構成した卸売指標価格）。
 注2：チョイス級、600~900ポンド。

なり、今年は卸売価格が安定していることで、小売店や外食産業で牛肉を取り扱う量が増えて牛肉の需要を下支えしているとしている。

(注) 三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2022年9月末TTS相場。

牛肉輸出量、記録的ペースで推移

USDA/ERSによると、2022年7月の牛肉

輸出量は13万9219トン（前年同月比3.3%増）と引き続き好調に推移している（表）。

輸出先別に見ると、7月は日本向けおよび中国向けが前年同月比でかなり増加した。また、輸出先第2位の韓国向けは前年同月比では減少しているものの、1~7月の累計では前年同期から2.7%増加している。この結果、日本、韓国、中国の3カ国で同月の輸出量全体の66.3%を占めている。また、フィリピン、オランダなど比較的小規模な市場向けの輸出量も前年同期比で増加した。

この状況について米国食肉輸出連合会（USMEF）のホルストロム会長は、「米国産牛肉に対する世界の需要は、特に小売りレベルで驚くほど回復力がある」とし、今後のさらなる成長への期待を述べた。一方で、主要相手国通貨に対する米ドル高の為替相場に懸念を示している。

表 輸出先別牛肉輸出量の推移

(単位：トン)

	2021年 7月	2022年 7月	前年同月比 (増減率)	シェア	2022年 (1~7月)	
					前年同月比 (増減率)	前年同月比 (増減率)
日本	33,071	36,337	9.9%	26.1%	221,185	1.3%
韓国	30,243	28,711	▲5.1%	20.6%	217,517	2.7%
中国	23,241	27,269	17.3%	19.6%	169,438	32.5%
カナダ	10,369	10,531	1.6%	7.6%	72,146	0.1%
メキシコ	11,435	8,984	▲21.4%	6.5%	68,827	▲17.1%
台湾	8,163	6,386	▲21.8%	4.6%	58,626	18.8%
香港	3,728	3,371	▲9.6%	2.4%	18,459	▲45.0%
フィリピン	1,316	2,733	107.7%	2.0%	14,787	34.9%
オランダ	1,076	1,592	48.0%	1.1%	10,903	83.3%
その他	12,080	13,305	10.1%	9.6%	97,319	28.3%
合計	134,724	139,219	3.3%	100.0%	949,206	6.8%

資料：USDA [Livestock and Meat International Trade Data]
 注：枝肉重量ベース。

(調査情報部 上村 照子)

豪州

ラニーニャ現象により肉牛取引価格は上昇傾向が継続

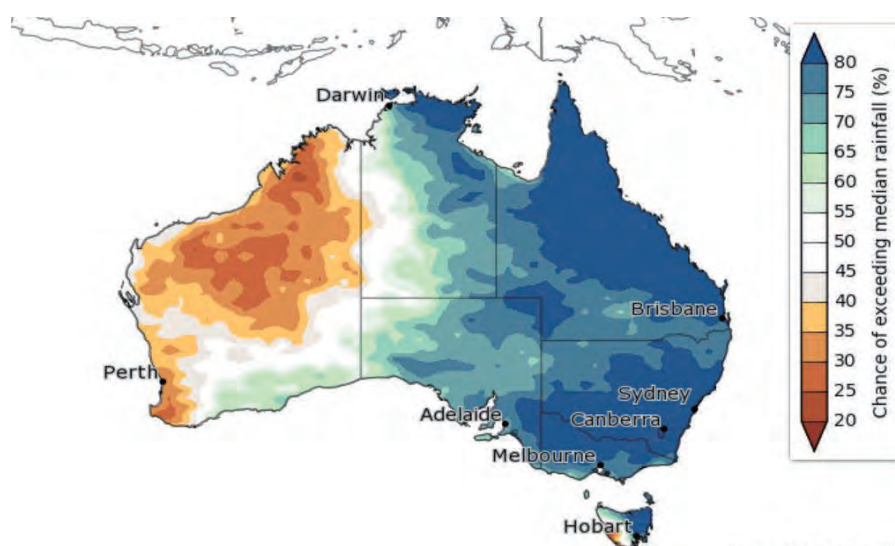
豪州気象局がラニーニャ現象を宣言

豪州気象局（BOM）は2022年9月13日、3夏連続となるラニーニャ現象の発生を宣言した。

ラニーニャ現象は、同年10～12月にかけて、

北部と東部で平均を上回る降雨の可能性を高めている（図1）。BOMは、23年の早い時期に平年の気候に戻る可能性があるとしているが、多雨による順調な牧草生育による牛群再構築の継続が見込まれ、と畜頭数の増加はまだ先になると考えられる。

図1 10～12月の豪州における降雨予想図



資料：BOMホームページから引用

肉牛取引価格は引き続き堅調に推移

肉牛生体取引価格の指標となる東部地区若齢牛指標（EYCI）価格は、2022年9月以降も継続して緩やかな上昇傾向が続いており、同月20日時点で1キログラム当たり1055豪セント（1015円：1豪ドル＝96.17円^(注)）となっている（図2）。

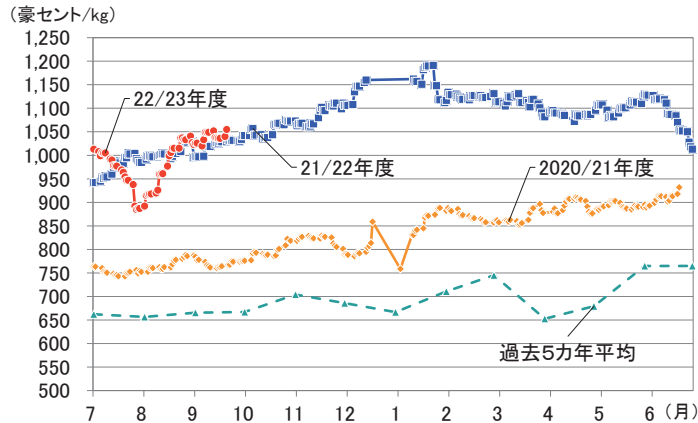
現地報道によると、畜産関係者らは、過去の長期的な干ばつにより現在でも農場では牛のいないパドックが多いとしているほか、順調な牧草生育を背景に牧草肥育農家からの牛の需要は依然として強いとしており、少なく

ともラニーニャ現象のピークとされる12月ごろまで、肉牛価格の上昇傾向は続くともみている。

豪州食肉家畜生産者事業団（MLA）は、降雨により牛の搬送が停滞し、家畜市場への供給が減少しているほか、一般的に春（9～11月）が牛の需要期であることなども、肉牛取引価格の堅調さに反映されているとしている。また、農場では雌牛の多頭飼育が進み、今後、子牛の増頭が見込まれることで、牛の供給は長期的に明るい見通しであるとしている。

（注）三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2022年9月末TTS相場。

図2 EYCI価格の推移



資料：MLA

注1：年度は7月～翌6月。

注2：東部地区若齢牛指標（EYCI）価格は、東部3州（クィーンズランド州、ニューサウスウェールズ州、ビクトリア州）の主要家畜市場における若齢牛の加重平均取引価格で、家畜取引の指標となる価格。肥育牛や経産牛価格とも相関関係にある。

注3：2020年3月26日～6月1日の間は、COVID-19の影響でEYCI価格の集計を実施していない。

牛肉輸出量は韓国および中国向けが急伸

牛肉生産では、依然として食肉処理施設の労働力不足などの課題があるものの、豪州農林水産省（DAFF）によると、2022年8月

の牛肉輸出量は9万2079トン（前年同月比19.4%増）と大幅に増加した（表）。

輸出先別に見ると、韓国および中国向けの増加が顕著となっており、韓国向けは1万8368トン（同42.5%増）、中国向けは1万6803トン（同41.1%増）といずれも大幅に

表 輸出先別牛肉輸出量の推移

（単位：トン）

	2021年 8月	2022年 8月	前年同月比 (増減率)	2022年 (1～8月)	
				前年同月比 (増減率)	前年同月比 (増減率)
日本	20,466	22,007	7.5%	149,067	▲ 4.8%
韓国	12,888	18,368	42.5%	104,365	1.3%
中国	11,908	16,803	41.1%	102,414	6.3%
米国	13,562	15,050	11.0%	85,567	▲ 7.7%
東南アジア	9,613	9,738	1.3%	60,215	▲ 9.4%
中東	2,249	3,366	49.6%	18,705	▲ 3.2%
EU	802	766	▲ 4.4%	5,448	0.1%
その他	5,662	5,981	5.6%	39,721	▲ 2.7%
輸出量合計	77,150	92,079	19.4%	565,503	▲ 2.6%

資料：DAWE

注1：船積重量ベース。

注2：東南アジアは、フィリピン、タイ、マレーシア、シンガポール、インドネシアの合計。

注3：中東は、イラン、イラク、シリア、レバノン、ヨルダン、イスラエル、サウジアラビア、クウェート、バーレーン、カタール、オマーン、イエメン、エジプト、パレスチナ自治区、アラブ首長国連邦を構成する七つの首長国のうち四つの首長国（アブダビ、ドバイ、フジャイラ、ラース・アル＝ハイマ）の合計。

増加している。現地報道によると、韓国向けの増加は、韓国政府による国内のインフレ対策として、牛肉を含む食品の価格引き下げに向けた取り組みの一環で、7月20日から年末まで10万トンの輸入牛肉の枠内税率を無税にしたことが主な要因としている。また中国向けの増加は、春節（旧正月）に向けた早

めの買い付けを要因に挙げているが、安価な南米産牛肉や米国の干ばつにより生産量が増加している米国産牛肉の輸入増により、中国市場における豪州産牛肉のシェアは縮小しているとしている。

（調査情報部 国際調査グループ）

ウルグアイ

22年の牛肉輸出量、堅調な需要を背景に増加傾向で推移

22年1～6月の牛と畜頭数は前年同期を上回る水準で推移

ウルグアイ食肉協会（INAC）によると、2022年1～6月の牛と畜頭数は134万2000頭（前年同期比8.7%増）となった。6月を除き前年同月を上回り、これまでの最多であった21年を上回るペースで推移している（図1）。これは、と畜対象となる個体が増加していることに加え、堅調な海外からの牛肉需要や高水準の国際価格により生産者の経営環境が良好な状況にあるためである。

近年のと畜動向を見ると、19～20年は、16～18年に生体牛（雄子牛）輸出が増加したため、と畜頭数が減少した。21年以降の

と畜頭数は、主要な生体牛輸出先であるトルコが19年から輸入制限措置を講じた結果、生体牛輸出が減少したことに加え、子牛出生頭数が増加したことなどから、1カ月当たり20万頭以上となった。

22年の去勢牛生産者出荷価格は高値で推移

INACによると、2022年の去勢牛生産者出荷価格は、堅調な海外からの牛肉需要を背景として21年に続き上昇傾向で推移している。22年6月第4週には1キログラム当たり5.614米ドル（819円：1米ドル＝145.81円^{（注1）}）の高値となり、21年初めと比較して26.2%上昇した（図2）。その後、

図1 月別牛と畜頭数の推移

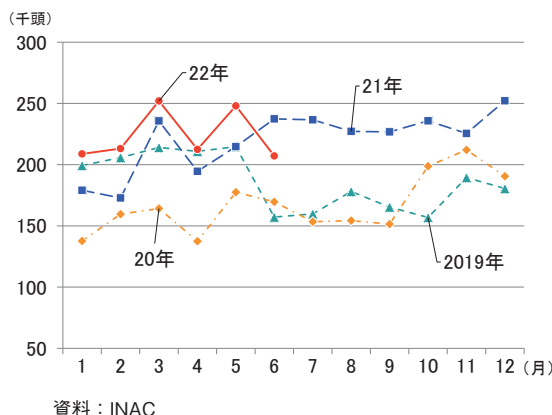


図2 去勢牛生産者出荷価格の推移



価格はやや下落したものの、直近の9月第2週の価格は、同5.106米ドル（745円）と前年同期を13.8%上回っている。

（注1）三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2022年9月末TTS相場。

牛肉輸出量、中国向けが全体の7割を占める

2022年1～7月の牛肉輸出量は、堅調な牛肉の国際価格などを反映して23万7236トン（前年同期比10.9%増）と前年同期をかなりの程度上回った（表）。また、輸出単価は、堅調な需要を反映して同30.1%高と大幅に上昇した。

輸出先別に見ると、最大の輸出先である中国向けは16万5460トン（同21.7%増）と大幅に増加し、全体の69.7%を占めている。21年下期（7～12月）および22年上期（1～6月）の牛肉需要が強かったこと、また、

主要な牛肉輸出国であるブラジル、アルゼンチン、豪州からの供給が一時的に滞ったことなどが、ウルグアイからの輸出量増加につながった。中国に次ぐ米国向けは2万3821トン（同2.3%減）と前年同期をわずかに下回ったものの、低関税枠（2万トン）を上回る数量が輸出された。このほか、EU向けは、ヒルトン枠と高級牛肉無税枠^{（注2）}での輸出が大半を占めている。EU加盟国ではオランダ向けが最も多く1万111トン（同14.2%増）となった。

また、19年2月に19年ぶりとなる輸出が再開された日本向けは、3894トン（同33.9%増）と前年同期を大幅に上回り増加傾向が続いている。このうち、約6割を冷蔵品が占めている。

（注2）ヒルトン枠（EU規則593/2013）は、EUにおける高級牛肉の低関税輸入枠であり、放牧肥育であることなどが条件とされる。また、高級牛肉無税枠（同481/2012。QUOTA481）は、一定期間の穀物給与などが義務付けられている。

表 牛肉輸出の推移

区分	2021年1～7月			2022年1～7月			前年同期比（増減率）		
	輸出量 （トン）	輸出額 （千米ドル）	単価 （米ドル/トン）	輸出量 （トン）	輸出額 （千米ドル）	単価 （米ドル/トン）	輸出量	輸出額	単価
中国	135,985	621,173	4,568	165,460	998,697	6,036	21.7%	60.8%	32.1%
米国	24,378	158,421	6,499	23,821	185,894	7,804	▲ 2.3%	17.3%	20.1%
オランダ	8,857	79,915	9,023	10,111	121,741	12,040	14.2%	52.3%	33.4%
イスラエル	7,191	50,438	7,014	6,269	51,877	8,275	▲ 12.8%	2.9%	18.0%
ブラジル	3,553	28,595	8,048	3,959	40,273	10,172	11.4%	40.8%	26.4%
日本	2,909	19,122	6,573	3,894	32,196	8,268	33.9%	68.4%	25.8%
カナダ	5,944	27,010	4,544	3,783	24,021	6,350	▲ 36.4%	▲ 11.1%	39.7%
チリ	2,165	13,552	6,259	3,711	31,125	8,387	71.4%	129.7%	34.0%
イタリア	4,712	32,178	6,829	3,198	27,528	8,608	▲ 32.1%	▲ 14.5%	26.0%
その他	18,239	116,737	6,400	13,030	142,132	10,908	▲ 28.6%	21.8%	70.4%
合計	213,933	1,147,140	5,362	237,236	1,655,484	6,978	10.9%	44.3%	30.1%

資料：ウルグアイ中央銀行

注1：HSコード0201、0202の合計。

注2：製品重量ベース。

（調査情報部 井田 俊二）

豚 肉

カナダ

豚総飼養頭数、4年ぶりに減少

豚総飼養頭数、前年同月比3.0%減

カナダ統計局（Statistics Canada）によると、2022年7月1日現在の豚総飼養頭数は1393万頭（前年同月比3.0%減）とやや減少し、18年以来4年ぶりに減少に転じた（表1）。内訳を見ると、肥育豚の頭数減少が顕著とな

っている。この要因について米国農務省海外農業局（USDA/FAS）では、カナダ国内の豚肉需要が停滞する中で、同国西部で発生している干ばつの影響による飼料コストの高騰や東部での食肉加工処理能力の低下による増頭意欲の減退などを挙げている。

表1 豚飼養頭数の推移

（単位：千頭）

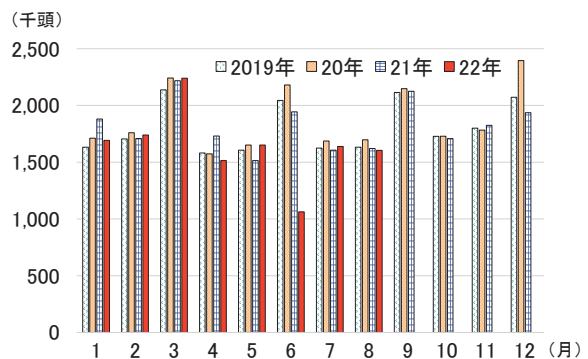
	2018年	2019年	2020年	2021年	2022年	前年比 (増減率)
繁殖豚	1,247.7	1,234.9	1,245.6	1,270.4	1,247.6	▲1.8%
肥育豚	12,822.3	12,885.1	12,914.4	13,084.6	12,682.4	▲3.1%
23kg未満	5,346.9	5,325.7	5,316.2	5,425.9	5,230.6	▲3.6%
23～53kg	2,432.6	2,334.7	2,453.7	2,572.3	2,458.7	▲4.4%
54～80kg	2,454.3	2,541.0	2,493.5	2,449.5	2,411.2	▲1.6%
81kg以上	2,588.5	2,683.7	2,651.0	2,636.9	2,581.9	▲2.1%
合計	14,070.0	14,120.0	14,160.0	14,355.0	13,930.0	▲3.0%

資料：Statistics Canada
注：各年7月1日現在。

22年1～8月豚と畜頭数、前年同期比7.6%減

カナダ農務・農産食品省によると、2022年8月の豚と畜頭数は160万4000頭（前年同月比1.0%減）とわずかに減少し、22年1～8月の累計の同頭数では、1314万4000頭（前年同期比7.6%減）とかなりの程度減少した（図）。同国食肉大手オリメル社の大規模工場の稼働率低下など、東部でのと畜能力が低下しており、養豚の主要州であるオンタリオ州やケベック州では、今後さらなる豚

図 豚と畜頭数の推移



資料：AAFC [Hog Slaughtering at Federally and/or Provincially Inspected Packing Plants]

群の縮小の可能性も示唆されている。

22年1～7月の豚肉輸出量、前年同期比2.2%減

カナダ統計局によると、2022年7月の豚肉輸出量は、8万7500トン（前年同月比7.7%増）とかなりの程度増加したが、22年1～7月の累計では、66万3200トン（前年同期比2.2%減）とわずかに減少した（表2）。同時期を主要輸出先別に見ると、米ドル高で推移する為替相場や米国産豚肉価格の高騰により、米国向けは20万3800トン（前年同期比43.5%増）と大幅に増加した。中国向けは引き続き同国内での豚肉生産の回復によ

り、7万6400トン（同60.6%減）と大幅に減少した。また、メキシコ向けが8万3900トン（同22.8%増）、フィリピン向けが9万3900トン（同29.0%増）、韓国向けが3万1700トン（同33.5%増）とそれぞれ好調となり、中国向けの減少分を相殺する形となった。一方、日本向けは11万3900トン（同4.9%減）とやや減少した。同期間の日本の総豚肉輸入量は増加しているが、現地報道によると、スペインやメキシコなどから中国向けに輸出していた豚肉が日本にも一部向けられたことで、カナダ産豚肉の輸入割合低下につながったと分析している。

表2 輸出先別豚肉輸出量の推移

（単位：千トン）

	2021年 7月	2022年 7月	2022年		2022年 (1～7月)		
			前年同月比 (増減率)	シェア	前年同月比 (増減率)	前年同期比 (増減率)	シェア
米国	21.7	26.8	23.5%	30.6%	203.8	43.5%	30.7%
中国	17.8	9.6	▲46.2%	10.9%	76.4	▲60.6%	11.5%
日本	16.0	15.8	▲1.6%	18.0%	113.9	▲4.9%	17.2%
メキシコ	12.1	12.3	0.9%	14.0%	83.9	22.8%	12.7%
フィリピン	4.3	10.3	143.4%	11.8%	93.9	29.0%	14.2%
韓国	3.2	5.5	71.9%	6.3%	31.7	33.5%	4.8%
その他	6.2	7.3	17.8%	8.3%	59.6	3.1%	9.0%
合計	81.3	87.5	7.7%	100.0%	663.2	▲2.2%	100.0%

資料：Statistics Canada

注1：HSコード0203。

注2：製品重量ベース。

（調査情報部 伊藤 瑞基）

E U

22年上半期の豚肉生産量は前年同期比で4.2%減

6月の豚肉生産量は前年同月比6.3%減

欧州委員会によると、2022年6月の豚肉生産量（EU27カ国）は、1頭当たり枝肉重量（92.6キログラム、前年同月比0.5%減）

およびと畜頭数（同5.8%減）の減少から、176万9520トン（同6.3%減）となった（表1）。

この結果、上半期（1～6月）の豚肉生産量は、前年同期比4.2%減の1128万7300トンとなった。主要生産国別に見ると、輸出

が堅調なスペイン（同1.7%増）が前年同期を上回った一方で、他の主要生産国はいずれも前年同期を下回った。

英国農業・園芸開発委員会によると、EU

の豚肉生産量は22年末まで前年同月比で減少し、冬場の需要期に向けて需給が引き締められると見込んでいる。

表1 主要生産国別豚肉生産量の推移

(単位：千トン)

	2021年 6月	2022年 6月	2022年 (1～6月)		
			前年同月比 (増減率)	前年同期比 (増減率)	前年同期比 (増減率)
スペイン	399	393	▲ 1.5%	2,638	▲ 1.7%
ドイツ	408	374	▲ 8.3%	2,271	▲ 10.1%
フランス	189	181	▲ 4.5%	1,092	▲ 1.0%
オランダ	144	141	▲ 2.1%	854	▲ 1.6%
ポーランド	147	140	▲ 5.0%	911	▲ 8.5%
デンマーク	148	125	▲ 15.3%	842	▲ 4.3%
イタリア	102	100	▲ 2.1%	653	▲ 3.6%
その他	351	316	▲ 9.9%	2,027	▲ 5.5%
合計	1,888	1,770	▲ 6.3%	11,287	▲ 4.2%

資料：欧州委員会「Eurostat」
注：枝肉重量ベース。

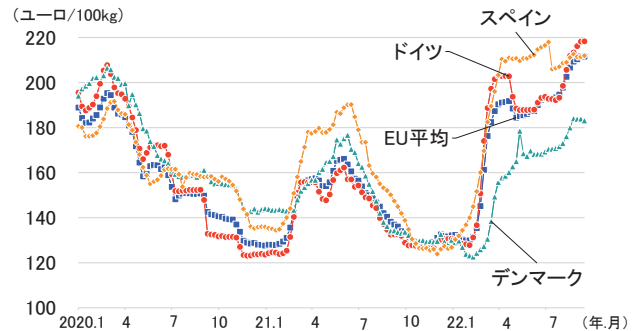
8月の豚枝肉卸売価格は、前年同月比38.5%高

欧州委員会によると、2022年8月の豚枝肉卸売価格（EU27カ国）は、前年同月比38.5%高の100キログラム当たり201.30ユーロ（2万8951円：1ユーロ＝143.82円^(注1)）となった（図）。

現地報道によると、気温が肉豚の生育に適した水準に低下してきたことや、生産者による価格上昇の期待感から保留傾向にあった肉豚の出荷が再開されてきたことで、豚枝肉卸売価格の上昇に鈍化の兆しも見られるとしている。一方で、燃料費や飼料費は依然として高い水準にあるとし、引き続き豚枝肉卸売価格を高騰させている供給不足の要因としている。

(注1) 三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2022年9月末TTS相場。

図 豚枝肉卸売価格の週別推移



資料：欧州委員会「Meat Market Observatory-Pigmeat」
注1：EU参考価格（CLASS E）。
注2：デンマークの2020年2月17日はデータなし。

豚肉輸出量は、前年同月比13.0%減

欧州委員会によると、2022年6月のEU域外への豚肉（生鮮・冷蔵、冷凍）輸出量（EU27カ国）は、23万4716トン（前年同月比13.0%減）と前年同月をかなり大きく下回った（表2）。

主要輸出先別に見ると、中国向けは

COVID-19による都市封鎖や中国国内の豚肉生産量の増加により同50.4%減と前年同月を大幅に下回った。一方、日本向け（同21.7%増）、韓国向け（同33.6%増）、フィリピン向け（同113.6%増）はそれぞれ前年同月を大幅に上回った。韓国はEUが主張す

るアフリカ豚熱の発生に対して地域主義の適用を認めたため^(注2)、今後、さらなる韓国向け輸出量の増加も見込まれる。

(注2) 海外情報「豚肉および鶏肉の韓国向け輸出が再開 (EU)」
(https://www.alic.go.jp/chosa-c/joho01_003356.html)
を参照されたい。

表2 輸出先別豚肉輸出量の推移 (EU域外向け)

(単位：千トン)

	2021年 6月	2022年 6月	2022年 (1～6月)	
			前年同月比 (増減率)	前年同期比 (増減率)
中国	117	58	▲ 50.4%	366 ▲ 30.4%
日本	27	33	21.7%	201 19.8%
韓国	18	23	33.6%	147 7.1%
フィリピン	11	23	113.6% (約2.1倍)	118 72.1%
オーストラリア	10	11	8.4%	67 9.9%
ウクライナ	3	9	274.4% (約3.7倍)	31 16.3%
米国	7	5	▲ 26.6%	52 8.1%
その他	78	72	▲ 7.5%	458 ▲ 55.2%
合計	270	235	▲ 13.0%	1,441 ▲ 30.0%

資料：「Global Trade Atlas」

注1：製品重量ベース。

注2：HSコードは0203。

(調査情報部 渡辺 淳一)

鶏 肉

タイ

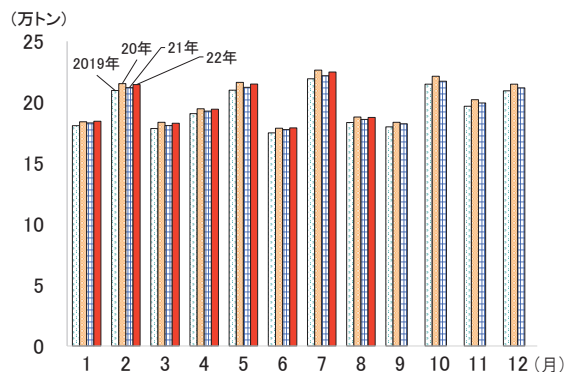
22年に入り鶏肉価格は引き続き高値で推移

22年1～8月の鶏肉生産は、前年比微増

タイ農業協同組合省農業経済局によると、2022年1～8月の鶏肉生産量は158万

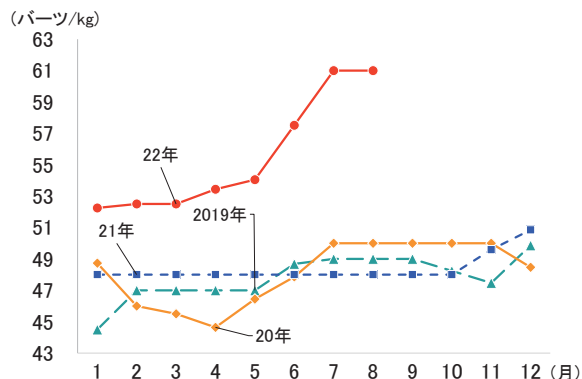
2112トン（前年同期比1.0%増）となった（図1）。昨年末のアフリカ豚熱発生の影響^(注1)による鶏肉への代替需要やコロナ禍からの脱却に伴う消費回復などにより前年をわずかに上回った。

図1 鶏肉生産量の推移



資料：タイ農業・協同組合省農業経済局

図2 鶏肉卸売価格の推移



資料：タイ農業・協同組合省農業経済局

22年の国内の鶏肉卸売価格は一段高

2022年8月の鶏肉卸売価格は、1キログラム当たり61バーツ（237円：1バーツ＝3.89円^(注2)）となり、昨年末からの高騰が継続している中でさらに上昇した（図2）。タイでは、アフリカ豚熱の影響が残る豚肉生産に起因した鶏肉代替需要、コロナ禍からの経済回復による世界的な鶏肉需要の増加などにより、国内外からの鶏肉需要が高まっている。しかしながら、最近では多雨の影響から食肉需要の減少が見られるとされており、9月に入り豚肉、鶏肉ともに価格は下落傾向にあるとされる。さらに9月下旬には、9日間にわたり肉類の喫食を控える菜食週間が控えていることから、一時的に価格は下落するものとみられる。

(注1) 海外情報「2022年の豚総出荷頭数、アフリカ豚熱などの影響で減少見込み（タイ）」(https://www.alic.go.jp/chosa-c/joho01_003182.html)を参照されたい。

(注2) 三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2022年9月末TTS相場。

22年1～7月の冷凍鶏肉輸出量は引き続き大幅減も7月単月では増加

2022年1～7月の冷凍鶏肉の輸出量は、18万4957トン（前年同期比22.9%減）と前年を大幅に下回ったものの、7月単月では2万8249トン（前年同月比3.4%増）と前年をやや上回っている（表1）。国内の鶏肉処理・加工施設では、入国規制の緩和により外国人労働者の受け入れが進み、労働力不足はおおむね回復したとされている。同期間の輸出量を輸出先別に見ると、主要輸出先である日本向けは前年同期に増加した反動から大幅に下回った。また、アフリカ豚熱の影響から回復した中国向けも、豚肉供給量の安定による代替需要の減少から前年同期を大幅に下回った。一方で、国内供給量の不足から生体鶏および鶏肉の輸出を停止したマレーシア向け^(注3)が前年を大幅に上回っている。

(注3) 海外情報「マレーシア産鶏肉輸出の停止で、インドネシア産の輸入を承認（シンガポール）」(https://www.alic.go.jp/chosa-c/joho01_003302.html)を参照されたい。

表1 輸出先別冷凍鶏肉輸出量の推移

(単位：万トン)

	2018年	2019年	2020年	2021年	前年比 (増減率)	2022年 (1～7月)	前年同期比 (増減率)
日本	13.7	12.2	12.8	16.7	29.8%	7.4	▲ 37.0%
マレーシア	3.2	4.1	4.1	4.7	14.7%	4.0	63.7%
中国	2.1	7.6	11.5	10.4	▲ 8.9%	4.1	▲ 35.6%
香港	0.5	0.5	0.9	1.0	9.0%	0.7	8.8%
韓国	0.6	1.1	0.8	1.3	55.5%	0.6	▲ 38.6%
その他	6.4	4.8	3.3	3.2	▲ 0.7%	1.7	▲ 9.4%
合計	26.5	30.3	33.3	37.3	11.8%	18.5	▲ 22.9%

資料：「Global Trade Atlas」
注：HSコードは020714。

22年1～7月の鶏肉調製品の輸出量はかなり大きく増加

2022年1～7月の鶏肉調製品輸出量は、38万2266トン（前年同期比13.5%増）と前年をかなり大きく上回った（表2）。輸出

先別に見ると、欧州向けをはじめ多くの仕向け先で増加している。前述の通り、労働力不足が解消したとされる中でコロナ禍からの世界的な経済回復による需要増が追い風となっている。

表2 輸出先別鶏肉調製品輸出量の推移

(単位：万トン)

	2018年	2019年	2020年	2021年	前年比 (増減率)	2022年 (1～7月)	前年同期比 (増減率)
日本	28.1	29.5	29.2	28.8	▲ 1.2%	18.3	3.0%
英国	15.8	16.5	14.2	13.6	▲ 4.7%	10.0	20.8%
オランダ	3.4	3.6	2.8	3.9	39.0%	3.4	53.8%
韓国	2.5	3.0	2.4	2.1	▲ 11.6%	1.9	39.4%
その他	5.1	6.4	6.1	6.7	9.8%	4.6	13.9%
合計	56.0	59.0	54.6	55.0	0.7%	38.2	13.5%

資料：「Global Trade Atlas」
注：HSコードは160232。

(調査情報部 海老沼 一出)

牛乳・乳製品

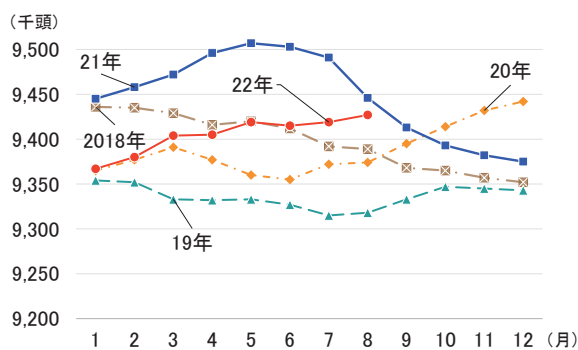
米 国

乳牛飼養頭数は増加傾向も、大幅増は見込めず

生乳生産量は2カ月連続で前年を上回る

米国農務省全国農業統計局（USDA/NASS）によると、2022年8月の乳用経産牛飼養頭数は前年同月比0.2%減の942万7000頭となった（図1）。21年5月をピークに減少していた頭数は22年に入り増加に転じており、8月も前月から8000頭増加するなど、同月としては昨年に次ぐ高い水準となっている。

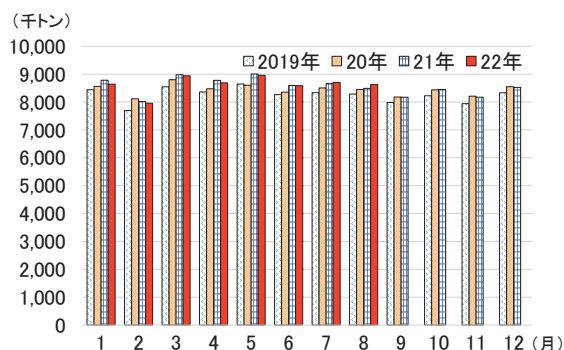
図1 乳用経産牛飼養頭数の推移



資料：USDA/NASS「Milk Production」

また、1頭当たり乳量の増加に伴い、8月の生乳生産量は862万7000トン（同1.6%増）と2カ月連続で前年同月を上回った（図2）。昨年末から上昇傾向で推移している生産者乳価に後押しされて飼養頭数は増加傾向にあるが、現地情報によると、飼料費や燃料費などの生産コストが依然高騰していることから、飼養頭数の大幅な増加は見込めないとされている。

図2 生乳生産量の推移

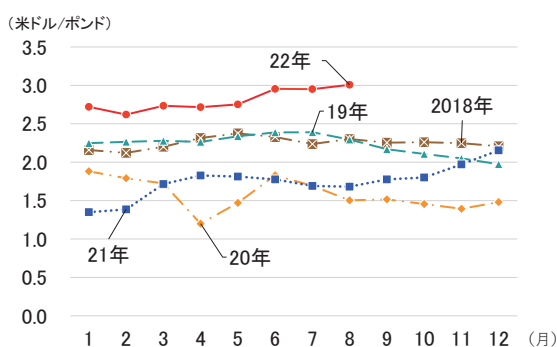


資料：USDA/NASS「Milk Production」

バター卸売価格は前年同月を大幅に上回る

米国農務省農業マーケティング局（USDA/AMS）によると、2022年8月のバターの卸売価格は、前年同月比78.8%高の1ポンド当たり3.01米ドル（1 kilogram当たり967.58円：1米ドル＝145.81円^(注)）と過去最高を記録した（図3）。現地報道によると、生乳がアイスクリームなどバ

図3 バターの卸売価格の推移



資料：USDA「DAIRY MARKET NEWS」

注：シカゴ・マーカントイル取引所（CME）の現物価格（グレードAA）。

ター以外の用途に仕向けられていることや、クリームをバター製造工場へ運ぶ輸送費の高騰などがバターの生産を抑制している要因とされている。また、米国内では食料価格が大幅に上昇している中で、消費需要の冷え込みや輸入バターの増加による価格下落の可能性はあるものの、クリスマスシーズンに備え小売店は在庫を補充するため、大幅な下落は見込めないと予測されている。

(注) 三菱USJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均為替相場」の2022年9月末TTS相場。

乳製品輸出量、ホエイおよび乳糖の増加が全体をけん引

米国農務省経済調査局 (USDA/ERS) によると、2022年7月の乳製品輸出量は、脱

脂粉乳が前年同月比で減少したものの、その他の乳製品は増加したため全体としては好調に推移した (表)。

品目別に見ると、乳糖およびホエイの輸出が好調となった。米国乳製品輸出協会 (USDEC) によると、米国西海岸の港湾の混雑状況の改善や、安定的な米国のホエイ価格、また、中国の養豚部門の頭数回復による飼料需要の増加を要因としている。特に乳糖の輸出は、中国とニュージーランド向けの好調な伸びにより、前年同月比22.4%増と大幅に増加した。

一方、脱脂粉乳の輸出は、22年に入り前年同月を下回って推移している。USDECによると、バター生産の抑制に伴う生産量の減少が主な要因とされている。

表 主要乳製品輸出量の推移

(単位：千トン)

	2021年 7月	2022年 7月	2022年		
			前年同月比 (増減率)	(1~7月)	前年同期比 (増減率)
脱脂粉乳	71.8	64.8	▲9.7%	490.9	▲8.5%
乳糖	31.8	38.9	22.4%	259.9	13.6%
チーズ	36.7	37.3	1.6%	267.0	14.7%
ホエイ	17.6	19.7	11.6%	118.1	▲13.9%
WPC	13.5	14.7	9.2%	98.3	16.2%
バター	3.4	6.1	77.7%	35.2	31.6%

資料：USDA [Dairy Data]

注：製品重量ベース。

(調査情報部 上村 照子)

E U

生乳取引価格は18カ月連続で前年同月を上回る

7月の生乳出荷量、前年同月比0.5%増

欧州委員会によると、2022年7月の生乳出荷量 (EU27カ国) は、1257万4270ト

ン (前年同月比0.5%増) と11カ月ぶりに前年同月をわずかに上回った (表)。

同月の生乳出荷量を国別に見ると、オランダ (同3.5%増)、ポーランド (同5.8%増)、アイルランド (同1.0%増) が増加した一方

表 主要生産国別生乳出荷量の推移

(単位：千トン)

	2021年 7月	2022年 7月	前年同月比 (増減率)	2022年 (1～7月)	
				前年同月比 (増減率)	前年同期比 (増減率)
ドイツ	2,765	2,748	▲ 0.6%	18,901	▲ 1.3%
フランス	1,975	1,971	▲ 0.2%	14,479	▲ 1.3%
オランダ	1,138	1,178	3.5%	8,132	▲ 0.2%
ポーランド	1,068	1,130	5.8%	7,632	2.4%
イタリア	1,084	1,083	▲ 0.1%	7,664	▲ 2.0%
アイルランド	1,047	1,058	1.0%	5,833	▲ 0.4%
スペイン	638	607	▲ 4.8%	4,374	▲ 1.5%
デンマーク	493	493	0.0%	3,337	0.4%
ベルギー	371	387	4.2%	2,662	1.3%
その他	1,930	1,921	▲ 0.5%	13,403	▲ 0.6%
合計	12,508	12,574	0.5%	86,416	▲ 0.6%

資料：欧州委員会「Eurostat」

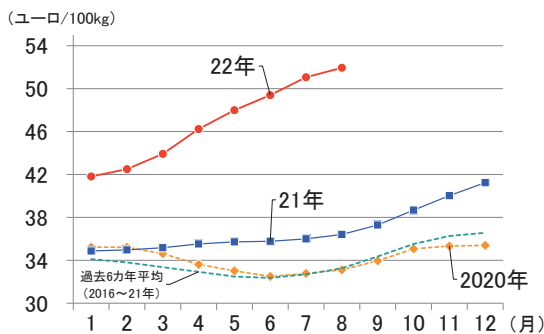
注1：速報値。

注2：データが未公表のルクセンブルグは除く。

で、出荷量上位のドイツ（同0.6%減）がわずかに減少し、フランス（同0.2%減）、イタリア（同0.1%減）は前年同月並みとなった。

また、22年8月の生乳取引価格（EU27カ国の平均）は、100キログラム当たり51.95ユーロ（7471円：1ユーロ＝143.82円^{（注1）}、前年同月比42.7%高）と依然として最高値を更新しており、18カ月連続で前年同月を上回っている（図1）。

図1 生乳取引価格の推移



資料：欧州委員会「Milk market observatory」

注1：直近月は推定値。

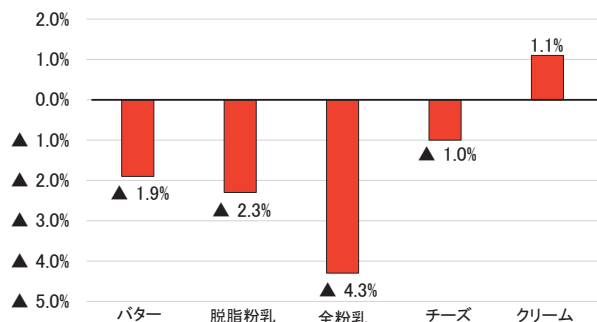
注2：データが未公表のルクセンブルグを除く。

（注1）三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2022年9月末TTS相場。

1～7月期のクリーム生産量、前年同期比増

欧州委員会によると、2022年1～7月のEUの主要な乳製品の生産量は、クリームが前年同期比1.1%増となった一方で、バター（同1.9%減）、脱脂粉乳（同2.3%減）、全粉乳（同4.3%減）、チーズ（同1.0%減）はいずれも減少した（図2）。現地報道によると、秋冬の需要期が近づいていることから、乳業

図2 主要な乳製品生産量（2022年1～7月）の対前年同期増減率



資料：欧州委員会「Milk market observatory」

にはクリームを追加製造の問い合わせがあるとしている。なお、生乳取引価格が過去最高値を更新していること、また、これらの乳製品の生産量が減少していることから、バター

をはじめとして乳製品価格も高水準で推移している。

(調査情報部 渡辺 淳一)

N Z

生乳生産量は低迷も、乳製品輸出量は堅調に推移

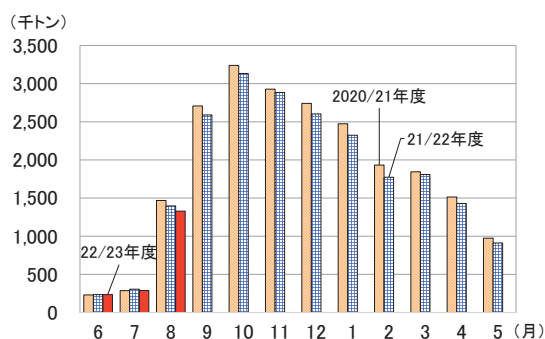
8月の生乳生産量、2カ月連続で前年同月を下回る

ニュージーランド乳業協会（DCANZ）によると、2022年8月の生乳生産量は132万9000トン（前年同月比4.9%減）と2カ月連続で前年同月を下回った（図1）。現地報道によると、8月は酪農主産地の大部分で記録的な降雨により放牧環境が不良となったほか、洪水により一部地域で集乳が停止されたとしている。また、今後の生乳生産見通しについてニュージーランド証券取引所（NZX）は、10月以降の牧草の生育が改善に向かうと見込まれるものの、生産コストの高騰やCOVID-19による労働力不足などから、引き続き前年割れで推移すると見込んでいる。

乳製品輸出量、主要4品目すべてで増加

ニュージーランド統計局（Stats NZ）によると、2022年8月の乳製品輸出量は、主要4品目すべてで前年同月を上回った（表、図2）。品目別に見ると、脱脂粉乳は、最大の輸出先である中国向けが前年同月比2割程度減少したものの、インドネシアやフィリピンなどの東南アジア向けが大幅に増加したことで、全体では前年同月をわずかに上回った。全粉乳は、最大の輸出先である中国やインドネシア向けが大幅に増加したことで、全体でも同2倍程度増加した。バターおよびバターオイルは、輸出量上位の中国、豪州、インドネシア、マレーシア向けがそれぞれ増加したことで、全体でも大幅に増加した。チーズは、主要輸出先である豪州向けがかなりの程度減少したものの、最大の輸出先である中国向けをはじめ、主要輸出先の日本や韓国向けがそれぞれ大幅に増加したことで、全体でも大幅に増加した。

図1 生乳生産量の推移



資料：DCANZ

注：年度は6月～翌5月。

表 乳製品輸出品の推移

(単位：トン)

品目	2021年 8月	2022年 8月	前年同月比 (増減率)	2022/23年度 (7月～翌8月)	
				前年同月比 (増減率)	前年同期比 (増減率)
脱脂粉乳	10,490	10,582	0.9%	39,507	19.9%
全粉乳	37,661	73,937	96.3%	194,189	24.9%
バターおよびバターオイル	13,760	20,615	49.8%	69,139	51.7%
チーズ	12,874	20,727	61.0%	51,656	4.1%

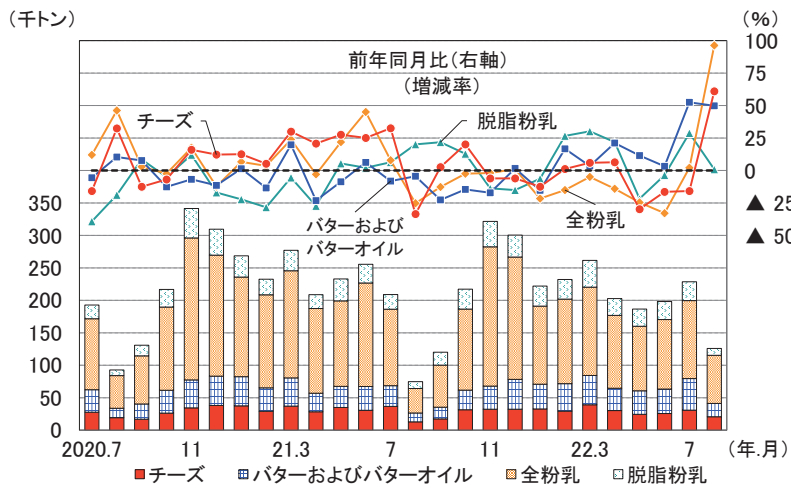
資料：Stats NZ

注1：HSコードは、脱脂粉乳が0402.10、全粉乳が0402.21と0402.29、バターおよびバターオイルが0405.10と0405.90、チーズが0406。

注2：製品重量ベース。

注3：年度は7月～翌6月。

図2 乳製品輸出品および前年同月比（増減率）の推移



資料：Stats NZ

注：製品重量ベース。

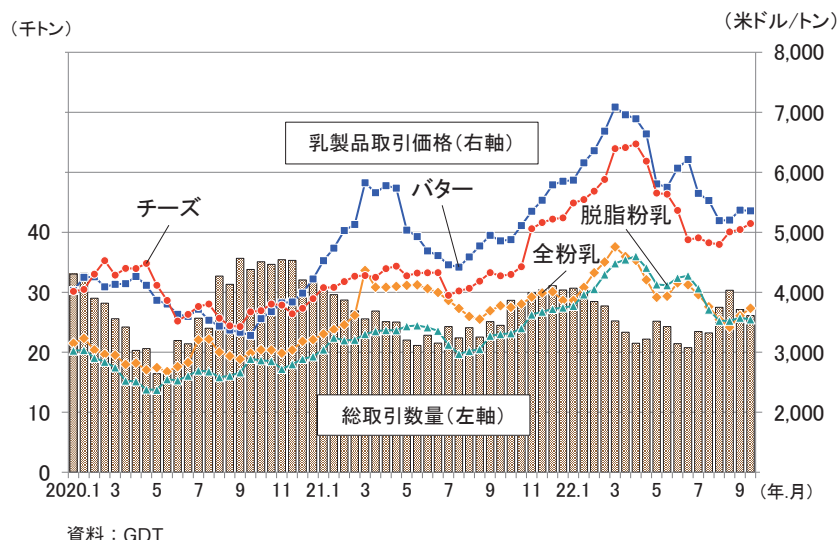
GDT価格、全粉乳およびチーズが堅調に推移

2022年9月20日に開催されたGDT^(注1)の1トン当たりの平均取引価格は、全粉乳およびチーズが前回（9月6日）を上回る結果となった（図3）。品目別に見ると、脱脂粉乳は、北アジア^(注2)の購入量が前回比2割程度増加したものの、東南アジアからの引き合いが弱まったため、価格はわずかに下落した。全粉乳は北アジアやEUからの引き合いが強

まったことで、価格はやや上昇した。バターは、北アジアや東南アジアからの引き合いが強かったものの、その他の地域からの引き合いが弱まったため、前回並みとなった。チーズは、北アジアからの引き合いが弱まったものの、東南アジアや中東からの引き合いが強まったため価格はわずかに上昇した。

(注1) グローバルデイレイトレード。月2回開催される電子オークションで、当該価格は乳製品の国際価格の指標とされている。
(注2) ニュージーランド外務貿易省は、中国、日本、香港、韓国、台湾を北アジアとしている。

図3 GDTの乳製品取引価格と総取引数量の推移



(調査情報部 工藤 理帆)

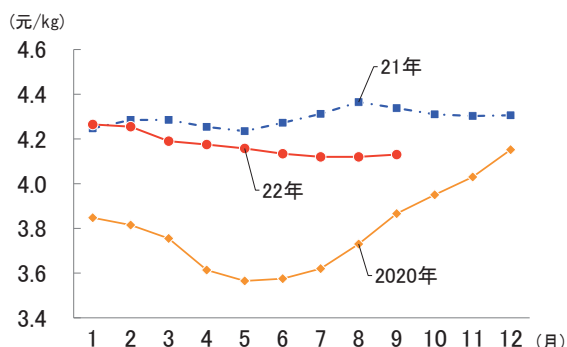
中国

主要乳製品輸入量の減少傾向続く

生乳価格は下げ止まりの様相

中国の生乳価格は、2022年に入り高値ながらも緩やかに下落していたが、同年7月最終週の1キログラム当たり4.11元（85円：1元＝20.67円^(注1)）を底に、9月には同4.13元（85円）と再び上昇基調にある（図）。今後、乳製品の需要期である冬場を迎える中

図 生乳価格の推移



で現地では、10月以降の大幅な下落はないとの見方が大勢を占めている。

(注1) 三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2022年9月末TTS相場。

輸入量減少傾向が継続するも、復調の兆しか

2022年1～8月の主要乳製品輸入量は、育児用調製粉乳（以下「育粉」という）を除く全ての品目で減少した（表）。一方で輸入額に注目すると、全品目で輸入量ほどの落ち込みは見られず、乳製品国際価格の高騰を反映した結果となった。

昨今の輸入量減少について現地専門家からは、(1) 前年度の輸入実績が非常に大きかったこと (2) 乳製品国際価格の高騰により輸入製品の価格優位性が低下し国産志向が高まったこと (3) 長引くCOVID-19の影響

表 主な乳製品の品目別輸入数量の推移

(単位：万トン)

	2018年	2019年	2020年	2021年	2022年 (1～8月)	前年同期比 (増減率)	【参考：輸入額】 前年同期比 (増減率)
全粉乳	52.1	67.1	64.4	84.9	57.0	▲16.6%	0.2%
脱脂粉乳	28.0	34.4	33.6	42.6	23.4	▲25.0%	▲4.8%
飲用乳	54.4	72.9	84.5	99.6	50.6	▲25.0%	▲18.1%
ヨーグルト	2.7	3.2	2.8	2.5	1.6	—	—
チーズ	10.8	11.5	12.9	17.6	10.4	▲19.6%	▲7.6%
バター	8.7	6.2	8.6	9.7	7.3	▲3.1%	28.4%
育児用調製粉乳	33.3	35.6	34.8	27.3	18.1	3.5%	4.6%
ホエイ	55.5	45.1	62.3	71.8	36.6	▲30.0%	▲16.3%

資料：「Global Trade Atlas」

注：HSコードは、全粉乳が0402.21と0402.29、脱脂粉乳が0402.10、飲用乳が0401.10と0401.20、ヨーグルトは0403.10（2021年まで）と0403.20（22年）、チーズが0406、バターが0405.10、育児用調整粉乳が1901.10、ホエイが0404.10。なお、ヨーグルトは、22年1月1日のHS品目表の改訂により、市場実態に合わせてヨーグルトの範囲が拡大されたため、22年とそれ以前のデータに連続性はない。

で経済が停滞しており、国産も含めた乳製品全体の消費が鈍い状況にあること一など複数の要因が挙げられている。

また、育粉の輸入量が増加した要因については、消費者の輸入育粉離れを受けた値下げなどの販売戦略により、輸入品の人気は再燃したためとの意見が聞かれた。育粉については、新生児数減少により需要全体が縮小している中で、ハンドキャリー（旅行者による持ち帰り）の減少や、輸入品の包装から新型コロナウイルスが検出されたことで小児用食品などを中心に国産を求める傾向が強まったことなどから、輸入量が振るわない状況にあった。

一方、8月単月の輸入量を見ると、育粉（前

年同月比23.1%増）、バター（同32.0%増）およびホエイ（同1.1%増）は前年同月を上回っている。また、直近のGDT^(注2)（22年9月20日開催）では、全粉乳などに対する中国の応札量が、最近の傾向に比べて多かったことが報道されている。これらを輸入復調の兆しと捉えることができるのか、今後の動向を注視する必要がある。

(注2) グローバルデイレートレード。欧州エネルギー取引所(EEX)、ニュージーランド最大の酪農協系乳業・フォンテラ社、ニュージーランド証券取引所(NZX)が共同保有する電子オークションで、当該価格は乳製品の国際価格の指標とされている。月2回開催。同回のGDTの詳細については、本誌43ページ「生乳生産量は低迷も、乳製品輸出量は堅調に推移」を参照されたい。

(調査情報部 阿南 小有里)

飼料穀物

世界

22/23年度の世界のトウモロコシ、期末在庫は前年度から微減の見込み

米国農務省世界農業観測ボード（USDA/WAOB）および米国農務省海外農業局（USDA/FAS）は2022年9月12日、22/23年度の世界のトウモロコシ需給予測値を更新した（表）。

これによると、世界のトウモロコシ生産量は11億7258万トン（前年度比3.9%減）と前月から703万トン下方修正され、前年度をやや下回ると見込まれている。地域別に見ると、主要産地での降雨により増産が見込まれる中国のほか、ウクライナなどで生産量が前月から上方修正されたが、フランス、ルーマニアおよびドイツでの減産が見込まれるEUや米国の生産量が前月から下方修正されたことで、これが吸収される形となった。

輸入量は、世界全体で1億7825万トン（同2.0%減）と前月から153万トン下方修正され、前年度からわずかな減少が見込まれている。地域別に見ると、カナダは米国での減産による供給量の減少を背景に輸入量が前月か

ら100万トン下方修正され、150万トン（同75.4%減）と前年度から大幅な減少が見込まれている。

消費量は、世界全体で11億8018万トン（同1.7%減）と前月から459万トン下方修正され、前年度からわずかな減少が見込まれている。地域別に見ると、ウクライナなどで前月から上方修正されたが、米国などで下方修正された。最大の消費国である中国は2億9500万トンと前月から据え置かれた。

輸出量は、世界全体で1億8358万トン（同9.7%減）と前月から204万トン下方修正され、前年度からかなりの程度減少が見込まれている。地域別に見ると、ウクライナで50万トン前月から上方修正された一方、米国で254万トン下方修正されたことで、これが吸収される形となった。

この結果、期末在庫は3億453万トン（同2.4%減）と前月から215万トン下方修正され、前年度からわずかな減少が見込まれている。

表 主要国のトウモロコシの需給見通し (2022年9月12日米国農務省公表)

(単位：百万トン)

区 分	2020/21年度	2021/22年度	2022/23年度		
		(推計値)	(8月予測)	(9月予測)	前年度比 (増減率)
米国					
期首在庫	48.76	31.36	38.86	38.73	23.5%
生産量	358.45	383.94	364.73	354.19	▲ 7.7%
輸入量	0.62	0.64	0.64	0.64	0.0%
消費量	306.69	314.34	308.62	304.81	▲ 3.0%
輸出量	69.78	62.87	60.33	57.79	▲ 8.1%
期末在庫	31.36	38.73	35.27	30.95	▲ 20.1%
アルゼンチン					
期首在庫	3.62	1.18	1.49	1.49	26.3%
生産量	52.00	53.00	55.00	55.00	3.8%
輸入量	0.01	0.01	0.01	0.01	0.0%
消費量	13.50	13.70	14.00	14.00	2.2%
輸出量	40.94	39.00	41.00	41.00	5.1%
期末在庫	1.18	1.49	1.49	1.49	0.0%
ブラジル					
期首在庫	5.33	4.15	4.65	4.65	12.0%
生産量	87.00	116.00	126.00	126.00	8.6%
輸入量	2.85	2.00	1.30	1.30	▲ 35.0%
消費量	70.00	73.00	77.00	77.00	5.5%
輸出量	21.02	44.50	47.00	47.00	5.6%
期末在庫	4.15	4.65	7.95	7.95	71.0%
ウクライナ					
期首在庫	1.48	0.83	6.27	5.57	6.7倍
生産量	30.30	42.13	30.00	31.50	▲ 25.2%
輸入量	0.02	0.02	0.00	0.00	-
消費量	7.10	11.40	11.70	12.70	11.4%
輸出量	23.86	26.00	12.50	13.00	▲ 50.0%
期末在庫	0.83	5.57	12.07	11.37	2.0倍
EU					
期首在庫	7.38	7.88	8.66	9.66	22.6%
生産量	67.44	70.98	60.00	58.80	▲ 17.2%
輸入量	14.49	18.50	19.00	19.00	2.7%
消費量	77.70	81.90	77.40	77.40	▲ 5.5%
輸出量	3.74	5.80	2.70	2.70	▲ 53.4%
期末在庫	7.88	9.66	7.56	7.36	▲ 23.8%
中国					
期首在庫	200.53	205.70	210.24	210.24	2.2%
生産量	260.67	272.55	271.00	274.00	0.5%
輸入量	29.51	23.00	18.00	18.00	▲ 21.7%
消費量	285.00	291.00	295.00	295.00	1.4%
輸出量	0.00	0.02	0.02	0.02	0.0%
期末在庫	205.70	210.24	204.22	207.22	▲ 1.4%
世界計					
期首在庫	307.46	292.78	311.84	312.14	6.6%
生産量	1,129.29	1,219.76	1,179.61	1,172.58	▲ 3.9%
輸入量	185.20	181.81	179.78	178.25	▲ 2.0%
消費量	1,143.97	1,200.40	1,184.77	1,180.18	▲ 1.7%
輸出量	182.60	203.26	185.62	183.58	▲ 9.7%
期末在庫	292.78	312.14	306.68	304.53	▲ 2.4%

資料：USDA/WAOB [World Agricultural Supply and Demand Estimates]

注：各国の穀物年度 世界、米国：9月～翌8月/ウクライナ、EU、中国：10月～翌9月/アルゼンチン、ブラジル：3月～翌2月。

(調査情報部 針ヶ谷 敦子)

世界の大豆生産は前年増も、 米国での減産見込で期末在庫は1億トン台割れ

米国農務省世界農業観測ボード（USDA/WAOB）および米国農務省海外農業局（USDA/FAS）は2022年9月12日、22/23年度の世界の大豆需給予測値を更新した

（表）。

これによると、世界の生産量は3億8977万トン（前年度比10.3%増）と前月から302万トン下方修正された。うち、最大の

表 主要国の大豆需給見通し（2022年9月12日米国農務省公表）

（単位：百万トン）

区 分	2020/21年度	2021/22年度	2022/23年度		前年度比 (増減率)
		(推計値)	(8月予測)	(9月予測)	
米国					
期首在庫	14.28	6.99	6.13	6.53	▲ 6.6%
生産量	114.75	120.71	123.30	119.16	▲ 1.3%
輸入量	0.54	0.41	0.41	0.41	0.0%
消費量	58.26	60.01	61.10	60.56	0.9%
輸出量	61.67	58.38	58.65	56.74	▲ 2.8%
期末在庫	6.99	6.53	6.66	5.44	▲ 16.7%
ブラジル					
期首在庫	20.42	29.40	22.71	22.46	▲ 23.6%
生産量	139.50	126.00	149.00	149.00	18.3%
輸入量	1.02	0.55	0.75	0.75	36.4%
消費量	46.68	50.25	50.25	50.50	0.5%
輸出量	81.65	80.00	89.00	89.00	11.3%
期末在庫	29.40	22.46	29.86	29.36	30.7%
アルゼンチン					
期首在庫	26.65	25.06	22.45	22.55	▲ 10.0%
生産量	46.20	44.00	51.00	51.00	15.9%
輸入量	4.82	3.50	4.80	4.80	37.1%
消費量	40.16	40.55	41.00	41.00	1.1%
輸出量	5.20	2.25	4.30	4.70	108.9%
期末在庫	25.06	22.55	25.70	25.40	12.6%
中国					
期首在庫	24.61	31.16	30.74	30.74	▲ 1.3%
生産量	19.60	16.40	18.40	18.40	12.2%
輸入量	99.76	90.00	98.00	97.00	7.8%
消費量	93.00	87.00	95.00	95.00	9.2%
輸出量	0.07	0.10	0.10	0.10	0.0%
期末在庫	31.16	30.74	31.46	30.46	▲ 0.9%
世界計					
期首在庫	94.73	100.04	89.73	89.70	▲ 10.3%
生産量	368.44	353.24	392.79	389.77	10.3%
輸入量	165.49	152.73	166.22	165.02	8.0%
消費量	315.41	313.85	327.77	327.07	4.2%
輸出量	164.86	153.36	169.08	167.88	9.5%
期末在庫	100.04	89.70	101.41	98.92	10.3%

資料：USDA/WAOB「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

注1：各国の穀物年度 米国：9月～翌8月／ブラジル、アルゼンチン、中国：10月～翌9月。

注2：消費量は搾油仕向量である。

生産国であるブラジルは前月から据え置かれたが、これに続く米国は収穫面積と単収の減少を反映し414万トン下方修正された。米国の単収は1エーカー当たり50.5ブッシェル(1ヘクタール当たり3170キログラム^(注))と前月から1.4ブッシェル下方修正された。このほか、アルゼンチン、中国はいずれも前月から据え置かれた。

輸入量は、世界全体で1億6502万トン(同8.0%増)と前月から120万トン下方修正された。最大の輸入国である中国は、世界全体の生産量の減少見込を踏まえ、前月から100万トン下方修正された。

消費量(搾油仕向け)は、世界全体で3億2707万トン(同4.2%増)と前月から70万トン下方修正された。うち、最大の消費国である中国は9500万トンと前月から据え置かれた。

輸出量は、世界全体で1億6788万トン(同9.5%増)と前月から120万トン下方修正された。うち、最大の大豆輸出国であるブラジルは前月から据え置かれたが、これに続く米国が生産量の減少見込みから191万トン下方修正されたことが反映されている。

この結果、期末在庫は9892万トン(同10.3%増)と前月から249万トン下方修正された。

今回の予測では、米国の生産量減少の要因について触れられていないが、トウモロコシと同じく米国中西部での干ばつが大きく影響したとみられる。

(注) 1ブッシェルを25.401キログラム、1エーカーを0.4047ヘクタールとして換算。

(調査情報部 横田 徹)

米 国

22/23年度の米国トウモロコシ、在庫率は8%台まで低下

USDA/WAOBは2022年9月12日、22/23年度(9月~翌8月)の米国のトウモロコシ需給見通しを更新した(表)。

生産量は、前月より続く単収減に加え、作付面積などの減少予測も受けて139億4400万ブッシェル(3億5419万トン^(注1)、前年度比7.7%減)と前月から4億1500万ブッシェル(1054万トン)下方修正され、前年度からかなりの程度減少すると見込まれている。

消費量は、120億ブッシェル(3億481万トン、同3.0%減)と前月から1億5000万ブッシェル(381万トン)下方修正され、前年度からやや減少すると見込まれている。内訳を見ると、飼料など向けやエタノール向けがトウモ

ロコシの減産や価格高騰などを背景に減少すると予測されている。

輸出量は、22億7500万ブッシェル(5779万トン、同8.1%減)と前月から1億ブッシェル(254万トン)下方修正され、前年度からの減少幅が拡大すると見込まれている。

この結果、期末在庫は、消費量よりも生産量の減少幅が大きかったことから12億1900万ブッシェル(3095万トン、同20.1%減)と前月から1億6900万ブッシェル(429万トン)下方修正され、前年度を大幅に下回ると見込まれている。

また期末在庫率(総消費量に対する期末在庫量)は8.5%(同1.8ポイント減)と、8%

台まで低下すると見込まれている。

生産者平均販売価格は、1 ブッシェル当たり6.75米ドル（984円。1 キログラム当たり38.7円：1米ドル＝145.81円^(注2)）と前月から上昇し、前年度からかなり大きく上昇し、12/13年度に記録した同6.89米ドル以来の高

値が予測されている。

(注1) 1 ブッシェルを約25.401キログラムとして農畜産業振興機構が換算。

(注2) 三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2022年9月末TTS相場。

表 米国のトウモロコシの需給見通し（2022年9月12日米国農務省公表）

区 分	一単位一	2020/21年度	2021/22年度 (推計値)	2022/23年度			前年度比 (増減率)
				(8月予測)	(9月予測)	参考(換算値)	
作付面積	(百万エーカー)	90.7	93.4	89.8	88.6	35.9 (百万ヘクタール)	▲5.1%
収穫面積	(百万エーカー)	82.3	85.4	81.8	80.8	32.7 (百万ヘクタール)	▲5.4%
単収	(ブッシェル/エーカー)	171.4	177.0	175.4	172.5	10.8 (トン/ヘクタール)	▲2.5%
生産量	(百万ブッシェル)	14,111	15,115	14,359	13,944	354.19 (百万トン)	▲7.7%
輸入量	(百万ブッシェル)	24	25	25	25	0.64 (百万トン)	0.0%
期首在庫	(百万ブッシェル)	1,919	1,235	1,530	1,525	38.73 (百万トン)	23.5%
総供給量	(百万ブッシェル)	16,055	16,375	15,913	15,494	393.56 (百万トン)	▲5.4%
国内消費量	(百万ブッシェル)	12,074	12,375	12,150	12,000	304.81 (百万トン)	▲3.0%
飼料など向け	(百万ブッシェル)	5,603	5,600	5,325	5,225	132.72 (百万トン)	▲6.7%
食品・種子・その他工業向け	(百万ブッシェル)	6,471	6,775	6,825	6,775	172.09 (百万トン)	0.0%
うちエタノール向け	(百万ブッシェル)	5,033	5,330	5,375	5,325	135.26 (百万トン)	▲0.1%
輸出量	(百万ブッシェル)	2,747	2,475	2,375	2,275	57.79 (百万トン)	▲8.1%
総消費量	(百万ブッシェル)	14,821	14,850	14,525	14,275	362.60 (百万トン)	▲3.9%
期末在庫	(百万ブッシェル)	1,235	1,525	1,388	1,219	30.95 (百万トン)	▲20.1%
期末在庫率	(%)	8.3	10.3	9.6	8.5		1.8ポイント減
生産者平均販売価格	(米ドル/ブッシェル)	4.53	5.95	6.65	6.75	38.7 (円/kg)	13.4%

資料：USDA/WAOB [World Agricultural Supply and Demand Estimates]

注1：年度は各年9月～翌8月。

注2：1 エーカーは約0.4047ヘクタール。

(調査情報部 針ヶ谷 敦子)

ブラジル

21/22年度トウモロコシ生産量、第2期作を中心に大幅増の見込み

ブラジル国家食糧供給公社（CONAB）は9月8日、2021/22年度第12回目となる主要穀物の生産状況等調査結果を公表した(表、図1、2)。この調査は、春植えの夏期作物(大

豆、第1期作トウモロコシなど)や秋植えの冬期作物(第2期作・第3期作トウモロコシ、小麦、大麦、ライ麦など)の生産予測を毎月公表するものである。

表 2021/22年度の主要穀物等の生産予測

	作付面積 (千ha)				単収 (トン/ha)				生産量 (千トン)			
	2020/21	2021/22			2020/21	2021/22			2020/21	2021/22		
		(8月予測)	(9月予測)	前年度比増減率		(8月予測)	(9月予測)	前年度比増減率		(8月予測)	(9月予測)	前年度比増減率
穀物合計	70,113.5	73,800.0	74,302.5	6.0%	3.7	3.7	3.7	▲0.3%	256,739.0	271,447.4	271,234.6	5.6%
トウモロコシ	19,943.6	21,584.4	21,581.9	8.2%	4.4	5.3	5.2	20.2%	87,096.8	114,691.3	113,272.1	30.1%
第1期作	4,348.4	4,542.5	4,542.5	4.5%	5.7	5.5	5.5	▲3.3%	24,726.5	24,979.1	24,979.7	1.0%
第2期作	14,999.6	16,372.1	16,378.6	9.2%	4.0	5.3	5.3	29.8%	60,741.6	87,406.7	86,120.6	41.8%
第3期作	595.6	669.8	660.8	10.9%	2.7	3.4	3.3	20.2%	1,628.5	2,305.6	2,171.8	33.4%
大豆	39,531.2	40,950.6	41,452.0	4.9%	3.5	3.0	3.0	▲14.1%	139,385.3	124,047.8	125,552.3	▲9.9%

資料：CONAB

注1：2022年9月8日公表データ。

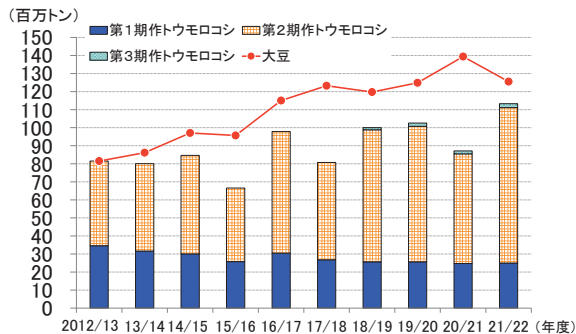
注2：第1作トウモロコシは、例年、9月ごろから南部より順次播種され、翌5月ごろまでに収穫をほぼ終える。

注3：第2作トウモロコシは、主に中西部と南部パラナ州で1～3月にかけて播種が行われ、6～9月に収穫される。

注4：第3作トウモロコシは、主に北部と北東部で5～6月にかけて播種が行われ、10～11月ごろに収穫される。

注5：大豆は、10月ごろから順次播種され、翌5月ごろまでに収穫をほぼ終える。

図1 トウモロコシと大豆の生産量の推移

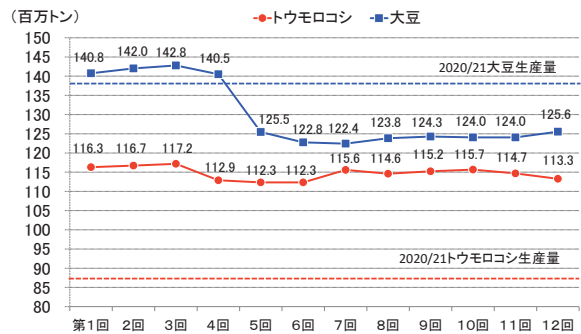


資料：CONAB

注1：2021/22年度は予測値。

注2：2022年9月8日公表データ。

図2 2021/22年度の生産予測値の推移



資料：CONAB

注：生産予測値の第1回目は10月公表、以降毎月更新。

21/22年度トウモロコシ生産量、前年度比30.1%増の見込み

2021/22年度（第1～第3期作）のトウモロコシ生産量は、前回より141万9200トン下方修正されたものの、1億1327万2100トン（前年度比30.1%増）と前年度を大幅に上回ると見込まれている。これは、CONABが統計を取り始めて以来、最大となった19/20年度の記録を更新するものとなる。

全生産量の4分の1弱を占める第1期作トウモロコシは、すでに収穫が終了しており、生産量は2497万9700トン（同1.0%増）と

前年度をわずかに上回ると見込まれている。作付面積は前年度より4.5%増加したものの、主産地である南部のリオグランデス州やパラナ州で21年11月から年明けにかけて深刻な降水量不足に陥り、単収が大幅に減少したことが影響した。

同じく4分の3強を占める第2期作トウモロコシは、収穫が最終段階にあり、生産量は前回より128万6100トン下方修正されたものの、8612万600トン（同41.8%増）と前年度を大幅に上回ると見込まれている。生産量の増加は、堅調な国際価格を反映して作付面積（同9.2%増）が過去最大となったことに加え、20/21年度に落ち込んだ単収が

大幅に回復（同29.8%増）するためである。なお、今回、降水量不足の影響や害虫（ヨコバイなど）による作物への被害により、南部のパラナ州、中西部のゴイアス州などで単収が低下し前回に続き生産量が下方修正された。

このほか、同じく2%程度を占める第3期作トウモロコシは、9月に収穫が始まる予定で、生産量は前回より13万3800トン下方修正されたものの、217万1800トン（同33.4%増）と前年度を大幅に上回ると見込まれている。今回は、北東部のセルジッペ州での水不足やアラゴアス州、ペルナンブコ州での大雨の影響などで単収が低下し生産量が下方修正された。

21/22年度大豆生産量、上方修正により前年度比9.9%減の見込み

2021/22年度の大豆の収穫は6月に終了し、前回より150万4500トン上方修正されたものの、1億2555万2300トン（前年度比9.9%減）となり、前年度をかなりの程度下回ると見込まれている。堅調な国際価格を反映して作付面積が同4.9%増となったものの、南部3州および中西部のマットグロッソドスル州で21年11月から年明けにかけてラ

ニーニャ現象の影響により深刻な水不足に陥り、単収が大幅に減少したことが影響した。なお、今回の修正はマットグロッソ州などで未調査地域の作付け分が追加されたものである。

需給状況を見ると、生産量は前述の21/22年度のほか20/21年度分も123万2300トン上方修正された。また、この修正に対応する形で、21/22年度の輸出量が196万7500トン上方修正され7719万9000トン（同10.3%減）と見込まれている。

22/23年度トウモロコシ、大豆生産量とも増加を予測

CONABは8月24日、2022/23年度穀物の最初の予測を公表した。これによると、トウモロコシの生産量は、生産コストの上昇はあるものの、作付面積の増加および単収の増加により1億2550万トン（前年度比9.4%増）と前年度をかなりの程度上回ると見込まれている。また、大豆の生産量については、堅調な価格を背景に作付面積が増加するとともに南部などで単収が回復することから1億5036万トン（同21.2%増）と大幅に増加すると見込まれている。

参考1 ブラジルのトウモロコシ需給動向

（単位：千トン）

年度	2018/19	2019/20	2020/21	2021/22	増減率 (%)
期首在庫量	14,582.1	10,189.4	10,673.8	7,781.8	▲ 27.1
生産量	100,042.7	102,586.4	87,096.8	113,272.1	30.1
輸入量	1,596.4	1,453.4	3,090.7	1,900.0	▲ 38.5
供給量	116,221.2	114,229.2	100,861.4	122,953.9	21.9
消費量	64,957.8	68,662.5	72,263.8	76,500.0	5.9
輸出量	41,074.0	34,892.9	20,815.7	37,000.0	77.8
期末在庫量	10,189.4	10,673.8	7,781.8	9,453.9	21.5

資料：CONAB

注：2022年9月8日公表データ。

参考2 ブラジル大豆需給動向

(単位：千トン)

	2020/21	2021/22	増減率 (%)
期首在庫量	4,221	8,851	109.7
生産量	139,385	125,552	▲ 9.9
輸入量	864	500	▲ 42.1
種子/その他	3,575	3,498	▲ 2.1
輸出量	86,110	77,199	▲ 10.3
加工量	45,934	48,013	4.5
期末在庫量	8,851	6,193	▲ 30.0

資料：CONAB

注：2022年9月8日公表データ。

(調査情報部 井田 俊二)

中国

トウモロコシおよび大豆の価格動向

国産トウモロコシ価格、飼料用需要から回復と予想

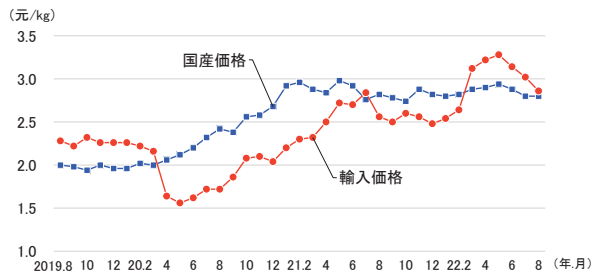
中国農業農村部は9月26日、「農産物需給動向分析月報（2022年8月）」を公表した。この中で、2022年8月の国産トウモロコシ価格は、下落傾向に歯止めがかかり前月同となった（図1）。国内のトウモロコシ需給を見ると、供給面に大きな動きが見られない中で、需要面では引き続きトウモロコシ加工企

業の多くが集中的なメンテナンス期間にあることで動きは鈍くなっている。

しかしながら、豚肉価格が回復基調にあることから飼料用トウモロコシ需要は増加傾向にあり、これが同価格を下支えした要因とされている。短期的には新穀が大量に供給されるまでの間は、この飼料用需要に支えられ、国産価格は若干の回復が予想されている。

主要養豚生産地である中国南部向け飼料原料集積地となる広東省黄埔港到着の輸入トウモロコシ価格（関税割当数量内：1%の関税+25%の追加関税）は、22年8月が1キログラム当たり2.86元（59円：1元＝20.67円^{注1}）となった。同価格は3月以降、国産価格を上回って推移していたが、5月をピークに下落している。また、同月の国産トウモロコシ価格（東北部産の同港到着価格）同2.80元（58円）に比べて同0.06元（1円）高となり、国産と輸入との価格差は縮小している。

図1 トウモロコシ価格の推移



資料：中国農業農村部のデータを基にALIC作成

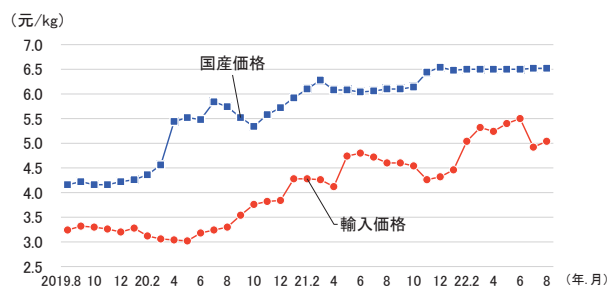
注1：国産価格は、中国東北部から広東省黄埔港までの運賃込み2級黄トウモロコシ価格。

注2：輸入価格は、米国メキシコ湾積出し2級黄トウモロコシの広東省黄埔港引渡し価格（関税割当数量内：課税後）。

国産大豆価格、供給量の制約から高値安定で推移

2022年8月の国産大豆価格は、前月と変わらず高値安定で推移している（図2）。国内の大豆の需給動向を見ると、生産地の在庫量が引き続き低い水準にある中で市場供給量は減少しており、一部で国家備蓄在庫の放出が行われているものの緩和までには至っていない。短期的には、9月に入り学校の再開や中秋節の休暇に加え、気候も涼しくなることで需要期を迎えることから、10月以降の新穀の供給までの間は高止まりでの推移が予測されている。

図2 大豆価格の推移



資料：中国農業農村部のデータを基にALIC作成

注1：国産価格は、山東省入荷価格。

注2：輸入価格は、山東省青島港引渡し価格（課税後）。

各地の価格動向を見ると、主産地である黒竜江省の食用向け国産大豆平均取引価格は、8月が1キログラム当たり6.16元（127円、前年同月比9.2%高）と引き続き高い水準にある。また、大豆の国内指標価格の一つとなる山東省の国産大豆価格は、同6.52元（135円、同6.9%高）と同じく高い水準で推移している。国産大豆価格と輸入大豆との価格差は、大豆国際相場の下落などから拡大し、1キログラム当たり1.48元（31円）となった。

このような中で、大豆の輸入量は高い輸入量を記録した前年から減少しつつも比較的高い水準で推移している。22年（1～7月）の輸入量は5417万トン（前年同期比6.0%減）、輸入額は穀物相場高騰の影響から同17.7%増の357億5800万米ドル（5兆2139億円：1米ドル＝145.81円^{（注）}）と報告されている。

（注）三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2022年9月末TTS相場。

（調査情報部 横田 徹）